

【論文】

東亜同文書院生の大調査旅行と 『支那省別全誌』および『新修支那省別全誌』との間

——書院生が見た近代東アジア——

愛知大学名誉教授、元愛知大学東亜同文書院大学記念センター長 藤田 佳久

1. はじめに

本稿は、20世紀前半期の清国と民国、さらには東南アジアから旧満州までの広大な東アジアの各地域をほとんど徒歩によるフィールドワークを行い、当時の各地域についての膨大な記録を残した東亜同文書院生による「大調査旅行」と、それをベースにして刊行された『支那省別全誌』全18巻¹と『新修支那省別全誌』9巻²（戦争で中断）との関係を明らかにしようというところに目的がある。従来、このような研究は行われてこなかった。

この東亜同文書院は、1901年、当時の清国の上海にビジネススクールとして設立された。その経緯については拙著のいくつかでも触れており、詳細はそれに譲る³。それより前の1890年、荒尾精により上海に立ち上げられた日本人の貿易実務者を養成する「日清貿易研究所」の流れと、近衛篤磨による清国の指導者たちとの合意による日清間の教育文化交流事業として出発した「南京同文書院」が、義和団の乱後に上海で一緒になり「東亜同文書院」としてスタートした。その目的はこれらの系譜からもうかがわれるように、日清間の貿易を積極的にすすめて両国の経済発展を促し、また教育文化交流により、特に清国側の学生たちを指導して教育レベルを引き上げようとするもので、これらの日清間の連携により清国への欧米列強の進出、さらにはその先にある日本への進出も抑制させようとする目的があった。

そのため、東亜同文書院は、優れた学生を募

集するため、主に県費制度により県ごとに入試を行い、各府県から数人ずつ選抜して採用した。入学後は貿易ビジネスマンとなるために徹底的な中国語と英語の学習が課せられ、列強が依存する買弁を通さないだけの語学力の習得を目指した。次いで清国、のちの民国時代の商取引システムの実地での習得や貿易品の商品学的調査、さらにその時代の各地域の実情を肌で感じ取るために最終学年で「大調査旅行」が1907年の第5期生から行われた。2-3人から5-6人のグループによる3カ月から6カ月の及ぶ長旅は700コースに及んだ。若い学徒たちのロマンと情熱そして好奇心がそれを支えた。こうして各地から書院生が集めた商品見本は実に10万点余りにのぼり、書院内に設けられた商品陳列所に収蔵、展示された。

一方、大調査旅行の成果は、1917年から1920年にかけて『支那省別全誌』（全18巻）、1941年から1946年にかけて『新修支那省別全誌』（9巻で戦時下、中断）として出版され、広く公刊された。各巻とも1,000ページ前後の大作であり、世界初の本格的な中国地誌書であった。こうして書院生たちの汗の結晶ともいえる収集した地域情報は、書院生たちの手により堂々と公開、刊行されたのである。

その際、書院生の調査報告書（卒業論文と見なされた）と日誌はどのような形で『支那省別全誌』や『新修支那省別全誌』を通して公表、公開され、大旅行の成果と連動したのかを検討するのが本論の目的である。

なお、調査報告がまとめられたのは、満州と

東南アジアを除く清国とその後の民国時代の各省であり、その地域を本論では対象とする。

ところで、筆者は書院生の大旅行調査報告に関心を持ち、1980年代から旅行記録を読み続け、生々しい記録からなる日誌部分を中心に、また必要に応じて調査報告も並行して、調査旅行記録全5巻の他、研究書も何冊かまとめてきた⁴。その過程で『支那省別全誌』と『新修支那省別全誌』にも強い関心を持ち、それらも併せて研究し、『支那省別全誌』と『新修支那省別全誌』との比較研究で科学研究費助成事業の助成も得た。そこでは『支那省別全誌』と『新修支那省別全誌』という中国地誌大系が、どのようなことを背景とし、どのような方針によって、どのように編集されたのかということについて研究を行った。『新修支那省別全誌』については、東京空襲で紙型が失われたために9巻で刊行が中断されているという研究上の制限があったものの、この研究は地理学における大きな成果でもあった。

2. 『支那省別全誌』と『新修支那省別全誌』の構成とその特性

(1) 『支那省別全誌』の場合

まず、『支那省別全誌』と『新修支那省別全誌』のうち、最初のシリーズとなった『支那省別全誌』について、その全体概要を見る。このシリーズは1917年から1920年の4年間に、東亜同文書院の経営母体の東亜同文会から出版され、編集も同会により設けられた支那省別全誌刊行会が行っている。全18巻の省名は以下のようなものである。

- 第1巻 広東省 (付 香港 澳門)
- 第2巻 広西省
- 第3巻 雲南省
- 第4巻 山東省
- 第5巻 四川省
- 第6巻 甘肅省 (付新疆)
- 第7巻 陝西省
- 第8巻 河南省

- 第9巻 湖北省
- 第10巻 湖南省
- 第11巻 江西省
- 第12巻 安徽省
- 第13巻 浙江省
- 第14巻 福建省
- 第15巻 江蘇省
- 第16巻 貴州省
- 第17巻 山西省
- 第18巻 直隸省

各巻の奥付を見ると、第1巻広東省の1917 (大正6) 年4月30日の刊行から順番に刊行され、最終巻である第18巻直隸省の1920 (大正9) 年9月30日の刊行まで、わずか3年半の間の刊行であり、極めて計画的な刊行であったことがわかる。しかも最初の広東省や広西省などは翌年には再版されており、発売が好調であったことがうかがわれる。初の本格的な、しかも、書院生たちによる清国、民国の生々しい新鮮な情報を伝えたことがこのシリーズの刊行を成功させたもとと考えられる。

このように全18巻は刊行順に刊番号がつけられており、出版企画の段階でなんらかの構想があったものと思われる。そこでどのような順で刊行されたのかを見る。図1がそれを示したものである。これによれば、広東からスタ

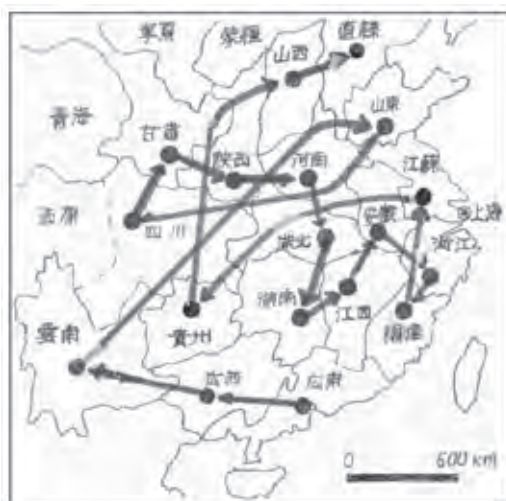


図1 『支那省別全誌』全18巻各省の巻番号順を示した図

ートし、広西、雲南、と華南の南辺ゾーンをカバーしたあと、一気に山東へ飛び、また四川の奥地へ飛ぶと、そこから隣接する省をつなぎ、華中地域をカバーして江蘇へたどり着くと、内陸の辺地である貴州へ飛び、最後は山西の華北へ飛び、隣の直隸でいわば「上がり」という構想が見える。つまり、大きく見れば、まず華南地域からスタートし、次に華中地域をカバーし、最後に華北地域をまとめるという伝統的な華南、華中、華北という地域区分による地域認識が編集者の構想にあったと言うことがいえそうである。ただ、その中で山東省と貴州省が巻番号上、飛地的な位置づけとなっているように見える。おそらく、山東省は資料整理が進み、早めに刊行が可能になったこと、また、貴州省は内陸の山間にあり、書院生のアプローチも苦勞し、逆にその編集にも苦勞したためだと思われる。特にこの貴州省は18巻中、総ページ数が741ページとほかの1,000ページ前後の各章に比べると最も少なく、それが当時の同省に関する情報量の少なさの中でまとめざるを得なかったことを示している。そのため、その後、貴州省のフィールドワークが進められ、『新修支那省別全誌』ではなんと貴州省は上下2巻分の分量で刊行されている。

さて、この壮大な企画の立案およびその思いはどこにあったのであろうか。

『支那省別全誌』刊行開始当時の東亜同文書院院長根津一は、その巻頭言の中で、これまで国情が極めて複雑な清国、その次代の民国を知り学ぶための良書がなく、隣国ながら理解が困難であったこと、しかるに書院生たちはこの国の地理、人情風俗から政治経済教育などまで究明しようと、明治40年以降、毎年100名ほどの学生が各班を構成して、混乱のこの国の中を4カ月ほど苦心惨憺、自炊露宿してこの国を体験し、約1,000人の書院生が記録した調査報告書が、今や20万ページに達したこと、これを『支那省別全誌』として世に送り、この国の研究に必須の良書に成ることを疑わない、と述べている⁵。

また、東亜同文書院の経営母体で、このシリーズの編集を担った東亜同文会の幹事長であった小川平吉も、巻頭文を述べている。そこでは、東亜同文書院設立以来、優秀な書院生たちが支那（中国）各省を巡り、20万ページの報告書の稿本が蓄積されたので、それを各省単位で編集して世に出したいことや、この国には歴史上さまざまな地理書があったものの現在についての地理書がなく、そうした状況を補うことによって、この国の研究に資したいことが述べられ、さらに次のように続けられている。

抑も支那は古来地理書に於いて備われる国なり。上代に禹貢あり、漢に水経あり、歴代の史書亦地理志を載す。降りて太平寰宇記大明大清の一統志等浩瀚なる書籍挙げて数ふべからず。然れ共、近世に至りては完全の著述なく、ことに現在の形勢を記録する書に乏し。是れ実に内外人士の等しく遺憾とする所なり。本会の本書を偏するこの闕漏を補い、聊か支那研究の便を図り、以て方今の急勢に應せんとするに外ならず。若し夫れ其の大成に至りては、将に之を他日に期せんと欲す。惟ふに政治経済其他百版の経世的施設は其基づく所一に国土人民の形勢を審にするに在り、地理書の必要実に茲に存す。此の書若し幸いに日支両国の親善に資し、東亜文運の進歩に益するあれば、吾人の欣幸焉れに如くはなし。〔原文は旧漢字とカタカナ〕⁶

(2) 『新修支那省別全誌』の場合

①刊行の趣旨と書院の姿勢

『支那省別全誌』が1920年に完結刊行されてからほぼ20年後の1941（昭和16）年、内容を一新した『新修支那省別全誌』の刊行が、再び東亜同文会によって始められた。具体的には同会の中に設けられた「支那省別全誌刊行会」が編集発行し、販売は東京の丸善が担当した。

その趣旨は、第1巻の『四川省（上）』の巻頭に掲げられた同会の会長である近衛文麿と編集委員長である一宮房次郎による「序」文の中に示されている。

なお、近衛文麿は、1922（大正11）年に牧野伸顕が東亜同文会の会長に就任した時にその副会長に就任し、その後の1936（昭和11）年に会長になり、終戦の年の1945年12月の逝去までその任にあった。その一方、東亜同文書院の院長には、根津一が長くその任に当たっていたが、1923（大正12）年に辞任し、そのあとを受け継いだ大津麟平も3年後の1926（大正15）年に辞任した。そのあとを受け、近衛文麿が1931（昭和6）年まで就任している。しかし、当時の近衛への政界からの期待は大きく、近衛が院長として上海の書院へ出向く機会は少なかった。また、当時の民国では、蒋介石の北伐が成功し、首都が南京に置かれたが、反蒋介石勢力も華南や瑞金で芽生えるなど、国内の安定には不安材料も見られた。

このように、『新修支那省別全誌』の第1巻が刊行された時の東亜同文会会長は、近衛文麿であった。東亜同文書院の院長は、大内暢三院長の後を受けて東亜同文会常務理事の矢田七太郎が、刊行の前年の1940（昭和15）年から就任していた。

さて、編集委員長であった一宮房次郎は、東亜同文書院の第1期生である。この時期、多くの東亜同文書院第1期生が東亜同文会の新世代の理事に就いているが、そうした中で一宮は常任理事に就任していた。

本題に戻り、両人の「序」文を見てみよう。

まず、近衛文麿は簡潔で概括的な序文を寄せ、

東亜大陸の平和並びにここに居住する諸民族の幸福と繁栄とを求むることは、我々東亜諸民族の目標であらねばならぬ。而して之を求むるためには東亜諸民族の協力が必要であり、相互の協力を求むるためには、まず大陸の実情を審にする事

が必要であると思ふ⁷〔原文は旧漢字〕

と述べ、東亜同文会の『新修支那省別全誌』の刊行の趣旨はそこにあるとする。そして次のようにも述べる。

『新修支那省別全誌』は専ら実地調査を基にして編纂したものであり、これによって、大陸の地理、交通、産業、経済、歴史、風俗等諸般の実情を明らかにすることを得べく、引いて大陸の繁栄とここの居住する諸民族の共存共栄とを得るに寄与するところ大なるべきを信じて疑はない⁸、

東アジアの平和と諸民族の幸福と繁栄が諸民族の願いであり、そのためには諸民族の歴史的基盤を知り、その資源を明らかにし、東アジアの実情を知る事こそ重要なのである。だからこそ、その実情に迫りうるフィールドワークの成果である『新修支那省別全誌』の刊行、公刊に価値があるというのである。同時に、当時日中戦争が始まっており、それも意識して日本の東アジアに寄せる立場もにじみ出ているようにも思われる。

一方、一宮房次郎の「序」文は、書院に身を置き、清国、民国下での大調査旅行を身近で経験した立場もふまえて、編集者としての見地もあふれ具体的である。それを要約すると次のようになる。

1. 東亜同文会は大正5年から同9年に懸けて、東亜同文書院生の調査旅行による調査内容を編纂し、『支那省別全誌』全18巻を刊行したところ、実地調査資料として世の絶賛を博した。
2. しかるにその後、各省の実情にも変化が見られ、書院生の調査報告書も多岐多数におよび、蓄積が大いに進んで、かねてから改訂編集の必要性が認められてきた。
3. 折しも「支那事変」により、その情勢が大きく変化する局面も生じ、「日支」両民

族の親善提携と「支那」大陸の経済的発展のためにも、大陸の実情を明らかにする必要性が出てきた。

4. そこで、書院生の実地調査資料を主にしながらも、各方面の新資料も加えて編集し、『新修支那省別全誌』全22巻、菊判各1,000ページ、合計22,000ページを刊行する事とし、まず四川省上下の2巻を刊行できることになり、喜びに堪えない。
5. 「惟ふに日支親善の道は、第一に相互に相知ることにあるべく、我が国人が支那各省の実情に明らかになることは、引いては日支提携、ならびに両国の経済的発展の上に寄与するところ大なるものがあると思ふ。この意味に於いて、余は本書の発刊を欣ぶと共に、之を広くわが国朝野に捧げたいと思ふのである」⁹

このように、『新修支那省別全誌』は基本的には前書『支那省別全誌』の延長発展型として1938(昭和13)年に企画され、前回以降の変化を踏まえながら、書院生たちの調査が発展的に多様化し多岐にわたるといふ実情の反映も組み込んで、ビビッドな民国像を描こうとした意図が伝わってくる。

その際、突然の「支那事変」が日本と民国関係に緊張をもたらした状況が新たに生まれたため、それへの対応が急遽不可避になった面もあったのであろう。そのためこの『新修支那省別全誌』の刊行が政治的外圧によって方向性を変えられてしまうのではないかという危惧が生じたことが2人の序文からにじみ出ているように思われる。確かに戦時下で各巻1,000ページ、全22巻、各巻1,800部のこの大規模な出版事業は、出版費を考慮しても際だった規模であり、実際に第5巻あたりからすでに紙質の低下が目立つことから用紙確保など、この事業が直面していた困難な状況が裏付けられる。しかし、書院生の苦労した大冒険的な大旅行の純粋な成果をどうにか出版させてやりたいという思いが、書院出身の編集長には

強くあったはずである。その点で、時流への配慮がにじみ出たように見える物言いは、リップサービスのなものだったように思われる。

それが証拠に、前述の「序」文に続く「凡例」の小文字の文章の中で、いくつかの編集方針と並び、真意が示されている。すなわち、「判例」の最後に次のように述べているからである。〔 〕内は引用者による。

本書編纂に際しては、交通、産業、年等、主として年月の経過によって甚だしくその記事としての価値を減ぜざるものに主力を注ぎ、政治、経済等、時局的動き、及び時勢による変化の多いもの、並びに軍事、行政等、全国普遍的性質を有するものは、だいたいその要領を示すにとどめた。要するに〔あくまで〕四川省の実体並びにその特色を深くつかんで、これを明かにすることに主眼を置いた¹⁰

その際、この全書は研究書ではないと表明しながらも、資料的価値を重視する姿勢として、時流には流されない客観的な立場を基本線で守ろうとしたことがわかる。この時代、1939(昭和14)年東亜同文書院は大学へ昇格しており、時流にのった安直な内容には抵抗があったといえる。それはまた東亜同文書院時代の大旅行指導者が書院卒業生で大旅行を経験した経済地理学担当の馬場敏太郎であったことも、地政学的な時局に流されるような状況を避け、地理学の学理を実質的にきちんと守ったという姿勢を示したといえる。それが今日でも、そしてこれからも『支那省別全誌』と『新修支那省別全誌』の価値が評価されていくことになるであろう基盤を形成したといえる。

②刊行された省と刊行過程、そして中断

では『新修支那省別全誌』9巻(で中断)の刊行された巻次の内容を次に示す。

- 第1巻 四川省 (上)
- 第2巻 四川省 (下)
- 第3巻 雲南省
- 第4巻 貴州省 (上)
- 第5巻 貴州省 (下)
- 第6巻 陝西省
- 第7巻 甘肅省・寧夏省
- 第8巻 新疆省
- 第9巻 青海省・西康省

当初の計画は全22巻であり、民国期の新たな全体像を3-4年の間に提示できるはずであった。しかし第1-2巻の四川省は1941(昭和16)年8月の出版で、太平洋戦争開始の直前であり、日本国内地では日中戦争の緊張感が緩い時代であった。第1-2巻の紙質は良質であり、1年後の第3巻も同様に、写真もくっきりと印刷されている。1943(昭和18)年の前半期の貴州省(上)と陝西省ではまだ質が保持されているが、秋へと刊行が少しずれこんだ貴州省の下巻になると紙質の低化が認められるようになり、物資不足の兆候が現れている。そして第7巻以降はざら紙へとさらに紙質が低下し、1944年の新疆、第9巻の青海・西康では写真も減り、用紙の確保に苦労したことがうかがわれる。しかし、戦時下においても出版は続けられ、第8巻の新疆が刊行されたのは1944年6月末のことであった。しかし、第10巻以降はせっかく準備が整いつつあった紙型が東京空襲で失われ、多くの関係者の努力の賜が水泡に帰した。そんな中、奇跡的に紙型が残った青海・西康省は、戦後の物資不足の最中である1946年9月に第9巻として刊行された。紙質は最悪、印刷も不十分で、写真は何が写っているかわからないほどの出来であったが、そこに一宮編集委員長、米内山康夫、馬場鋏太郎などの常務委員や理事の出版への強い意志があり、辺境地域の地理的世界を伝え、記録に残したい思いがあったと思われる。ここに大陸を歩き巡った書院魂の存在感があったと思われ、これにより貴重な辺地の地域情報が残されたのである。

なお、前掲した『新修支那省別全誌』は当初計画の全22巻は全うできなかったが、四川から始まる民国メーンランドのいわば辺境地帯の省から刊行されている。この点については、この編集に関係した第22期書院卒業生の吉本仁は、その記憶の中で、「さていずれの省から着手するのか」ということの議論で、「辺境地域から始めるのが適当ということになり、四川省から着手することになった」と述べている。前述したように、貴州省や新疆省など前回の『支那省別全誌』では薄手であった辺境地域をまずはカバーしていこうというであったのであろう。貴州と四川の両省は上下各二巻の力作であった。吉本は当時の霞山会館の編集室でまず四川省の交通と産業部門を担当し、大旅行誌や調査資料の整理と区別、さらに読解作業で相当の時間がかかり、書院生の進路を地図と対応させながら読破し、書院生がどんなに苦労した旅であったかに思いをはせ、その後の辺境の各省の編纂でも書院生の正確な記録に万感胸に迫ったという。四川省をまとめる時に参謀本部にいたある少佐から軍部の資料も見せるという話が来たので出かけて、みたが、制約が多かったためにやめたという。

吉本は、原稿執筆では、書院卒業生米内山康夫の卓越した手腕と書院から帰国した馬場鋏太郎の参考資料の指導に負うところが多かったとし、書院卒業生の強い関わりがあったことも述べている¹¹⁾。

しかし、現地視察や資料整理、原稿執筆で何人かが体調を崩し、亡くなったとも記している。ある種の使命感の中で激務の作業であった。

③省の刊行順と各省の記述構成

最後に、『新修支那省別全誌』の刊行順を地図上に示しておく。図2がそれである。すでに述べたように、全22巻分の原稿は出来ていたものの戦禍のために9巻を出したところで中断せざるを得なかった。もし全巻刊行できていたならば、メーンランドでも多くの調査が

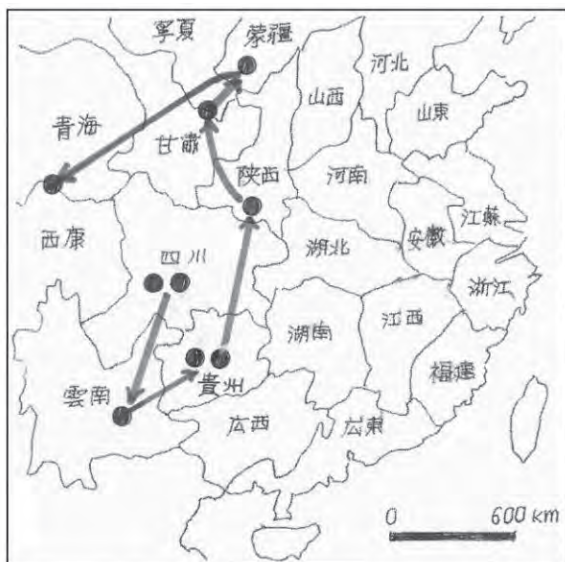


図2 『新修支那省別全誌』9巻分の各省の巻番号順を示した図

蓄積されており、『支那省別全誌』と比較することによって民国時代の地域的なダイナミクスの把握が可能となり、より研究が進展したと思われる。その点は残念な事であった。それは残された9巻の内容からもそのレベルは推測されよう。

そして、この9巻は当時最も上海から距離が遠く、経済的にもようやく近代化の波が届き始めた辺境の地域であり、書院生にとって徒歩旅行に困難を伴う地域であった。それが貴州や四川のように1省2巻本にまでまとめたところに、1920年代以降の書院生の現地調査の蓄積をはかった力量があったといえる。以前の『支那省別全誌』では付録的であった青海省も西康省との合作ではあるものの独立冊になったし、もっとも遠い新疆は独立巻となった。これにより『支那省別全誌』は実質的に民国全域をカバーできたといえる。事実上の世界初の民国中国地誌の完成であったといえる。

図2に示すように、刊行はまず四川の2巻本、あわせて1,700ページという規模で世間を驚かすほどのデビューをさせ、その第1巻は書院生の大旅行の実績コースを駆使して、ふんだんに省内各地を書院生の案内でまず陸路を巡る仕掛けから始まっており、従来の伝統的な地

誌構成を吹き飛ばしている。まさに書院生の大旅行の成果が凝集されており、次いで後半では関連した都市が紹介されている。前述の吉本仁は、これらを読みたどりながら、自分もまるで現地に旅するような感覚に包まれて感動したという。それは筆者(藤田)もかつて彼らのあとを追うように記録を読んだり、現地でその足跡をたどったりした時の思いと同じであった。

なお、四川省の第2巻は産業と経済が中心で、これもすべて書院生の調査成果である。ただし巻末に、名勝と歴史が付加され、前者は今日で言えば観光資源に当たる。これらのうち、歴史部分の古代から清代までは三上次男(東京帝国大学講師)が、民国期については波多野乾一、名勝については中山久四郎(東京文理科大学教授)が、うち峨眉山については野中重徳が執筆するなどの協力を得ている。書院生の調査研究分野も広がり多岐に亘るようになる中で、これは他の省についても若干の他の分野の専門研究者の協力を得て、内容を立体的に工夫している。この点にも『新修支那省別全誌』の特徴が表れている。

四川省の次は雲南省であるが、そこは当時のメインランドから見れば奥地であった。現地へたどりつくまでに多くの日数を必要とし、それを活用して道中のいろいろな場所を観察見学して旅を進め見聞と視野を広げた。

この第3巻の雲南省も、概説のあと陸路を中心にした書院生の大旅行のコースが縦横に紹介されている。たとえば、筆者も紹介したことのある雲南とビルマとをつなぐ陸路¹²は、昆明からコースを変更してビルマへ抜けるいくつもの大峡谷を越える難路の希有な記録がそのまま使われている。また、昆明から東川を経て昭通に抜けるコースのうち、とりわけ東川の山岳地帯横断コースは急峻で深い大渓谷を進むものである。筆者は、ここを調査したことがあるが、その際も斜面崩壊が続き、降雨による途絶もある険悪な難所であった。このコースも正確に記録しており、まさにオリジナルな

ライブ感に満ちた克明な記録になっている。他の交通方法も含めて約300ページも占めている。そのあとに都市や集落が路線ごとにこれも300ページほど編集記録されている。続いて産業、資源が記録され、最後に貿易、金融などが経済というくくりで付加されている。ただし、四川のように名所や歴史は正面から取り上げられてはいない。遠隔地であり、観光的な側面はまだほとんどなかったということである。

ところが、第4-5巻の貴州省から第9巻までの編構成が大きく変わる。すなわち、編は自然環境、人文、都市、産業と資源、工業、商業貿易、財政金融、交通運輸、歴史と名勝の順になり、前巻までの書院生の作品を正面に掲げたライブ感ある構成ではなくなり、当時の伝統的な地誌構成に再編成されている。そのため、前巻までの交通路のライブ感あふれる記述は最後尾に置かれ、全体を貫いて読ませる面白さが消え、辞典的で形式枠的な構成になっている。これは前巻までの編集者が広く大陸を広く歩き回り、その文化的研究や文化の視点も持った米内山康夫であったことによる。米内山は本書を一般的な地理書ではなく、書院生の実地調査による報告書を生かした特性がでるように編集を目指した。第1巻の『四川省』で書院生の大旅行コースのライブ感あふれる記録を冒頭に持ってきたのはその目的のためであろう。それが、編集者が馬場鉄太郎に交代し、形式が地理書的に変えられたのである。馬場は書院卒で書院の経済地理や商品学を教授し、のち副院長(教頭)になった人物である。書院の大学昇格の過程で、本間喜一が教頭として内地から赴任すると、書院を辞職して故郷の近江へ帰国していたのだが、『新修支那省別全誌』編集の新しいスタッフとして招請され、第4巻からは編集長に就いていた。書院時代には交通地理や行政地理、民国地理などに関する厚冊な著書を多数出版しており、それらの成果も踏まえて前任者とは異なる編構成を進めたものと思われる。そして書院教授の

専門家の小竹文夫(歴史名勝)、成宮嘉造(行政、経済建設)、坂本一郎(方言)、上海自然科学研究所の尾崎金右衛門(自然環境)を整理執筆委員などに加え、専門性を加えようとした。こうして編構成は馬場による地誌的で辞典的な構成へ変化し、その編構成は以降の巻へも引き継がれた。馬場には書院の教授時代、書院生の大調査旅行を指導した自負心もあったと思われ、そのため書院生の成果も利用しつつ、客観的記述へ各編集委員の執筆を促したと「凡例」に記している。また、全巻とも丁寧な索引が付けられ、利便性が増している。

3. 東亜同文書院生による大調査旅行の展開

(1) その始まり

東亜同文書院は1901年に清国における実務者養成のビジネススクールとして近衛篤磨率いる東亜同文会によって設立された。

それは、陸軍将校であった荒尾精が清国時代の漢口で行っていた情報収集を目的とする私塾をベースとし、より発展させた学校として1890年に上海に設立した日清貿易研究所に起源があった。この学校も日清間での貿易振興によって欧米列強に対抗しようとする荒尾の考えによるビジネススクールであったが、日清戦争で多くの優れた卒業生を失っている。

東亜同文書院を設立した東亜同文会の近衛篤磨は華族であり、独学の末、ドイツに留学し学位を取得した人物である。アメリカも訪問した2度目のヨーロッパ歴訪で、ロシアを含めたヨーロッパ諸国のアジア政策を知り、その帰途に日清戦争後の清国に立ち寄って当時の実力者であった劉坤一と張之洞に会い、清国の教育レベルアップのための日清共同による南京での学校設立(南京同文書院)を提案して歓迎され、これを開設したのだった。半年後、義和団の乱が南京に迫ると、学校を上海へ避難させることを余儀なくされたが、荒尾の上海でのビジネススクール構想を受け継ぐ根津一の提言を受けて、「東亜同文書院」を発足させたのだった。設立間もない頃のスタッフと

教授科目を表1に示した。貿易ビジネスに関して清国語を中心に、漢文、尺牘、時文と英語のウエートは極めて高く、そして商取引に関係した商業学、商業史、商慣習、簿記、商業地理、商品学、関連科目に法学、政治学、経済学、財政学、外交史なども設けられ、そこで学ぶ経済活動の精神哲学を根津一が倫理学でカバーした点は、マックスウェーバーが資本主義の精神を説いたことに匹敵しうると考える。これは現代的に言えば、紛れもなくグローバルなビジネススクールであり、日本最初のものであることはもちろん、現地語と現地に立地して教育した点において世界初の本格的なビジネススクールであった。

その詳細はこれまでの拙稿などに譲るが¹³、入学生は各県費生という形で選拔し、優れた学生を商務科と政治科に毎年100人ほど迎えた。そして伝統的な清国の商慣習を習得するために清国語と英語を徹底的に鍛え、現地調査旅行を必須とした。当初は書院が資金難で集団による修学旅行方式をとったが、班別に商慣習や商業組織の調査を行い、その報告書を用いて『支那経済全書』全12巻¹⁴を丸善から発行し、書院の名前を広く知らしめ、高めた。

そうした時期、第2期生の卒業時に直前に結ばれた日英同盟によるイギリスから外務省への西域調査の要望に応えられるのは、書院しかなく、院長であった根津一から請われた4人が2年をかけて、ロシア勢力の同地域への浸透状況を調べ、困難な旅を乗り越えて帰還した。これを見た他の書院生も大旅行にあこがれた。それに応えようにも書院は財政的に苦しく、学生個々への援助は無理であったが、外務省が4人の西域調査成功に対して書院に報奨金を贈ったことから、書院当局は取りあえず学生が要求する個別班単位の調査旅行（「大旅行」）の3年間の実施が可能であるとして、1907年第1回の大旅行を実施した。テーマもコースも書院生の自主性に任された。これがこののち約半世紀に渡って続くことになる書院を特徴づける大旅行の始まりとなった¹⁵。

表1. 初期の東亜同文書院のスタッフと担当科目(1908年)

職 名	氏 名	就 職 年 月 日	担 当 科 目
院 長	根津 一	明治35. 5. 5	倫理
教 頭	法 学 士・上野 貞正	41. 4. 15	
教 授	法 学 士・福岡 禄太郎	36. 10.	法律、政治
同	法 学 士・田部 環	40. 12. 7	経済、財政
同	文 学 士・大村 欣一	40. 7. 28	制度、外交史、通商史
同	商業学士・森川 一甫	38. 9. 9	商業学、簿記、商業実践
同	商業学士・中川 精吉	39. 12. 1	商業学、簿記
同	布施 知足	40. 1. 21	英語
同	青木 喬	41. 12. 6	中国語
同	橋詰 照江	41. 4. 13	漢文、尺牘、時文
助 教 授	三木 甚市	41. 3. 23	中国語
同	松永 千秋	40. 7. 28	中国語、制度
同	富岡 幸三郎	40. 7. 28	中国語、商品学、商業地理
助教教授兼寮監	小田 勝太郎	40. 3. 28	習字
幹事兼寮監	和田 連次郎	41. 4. 27	
講 師	神津 助太郎	41. 1. 8	商業慣習
同	沈 文藻（字、少坪）	39. 9. 2	尺牘
同	端 璵（字、壽如）		中国語
同	全 寿（字、介生）		中国語
同	速 功（字、建助）		中国語
同	ミス・フィン	40. 10. 22	英語
同	ミセス・ハーブ	41. 1. 14	英語
会 計 係	安河内 弘	35. 10.	
事 務 員	佐藤 喜平次	41. 5. 1	
同	田中 末次郎	41. 5. 1	
校 医	品川 賢斎	40. 5. 23	
文書部総監	小田 勝太郎		
文書部講師	安河内 弘		

（『東亜同文書院大学史』）

(2) その展開

その形は、書院生たちが2-5ないし6人ほどで班を作り、自分たちで調査テーマとコースを設定し、最終学年の5月頃スタートし、夏休みも利用して3カ月から4カ月、さらには6カ月間前後を徒歩で巡るのが標準型となっていた。なかにはチベット方面の遠隔地へ挑み、5カ月から6カ月も旅をし、初冬の頃、出発時の夏服姿で帰院するケースもあった。すでに1、2年生で浙江省の杭州や銭塘江、紹興、さらには漢口などをめぐる小見学旅行などを経験し、個人で夏休みを利用して各地を数人の仲間と巡る経験もしていたが、この大調査旅行こそ書院生の待っていた一大行事であり誇りだとして、旅行を前にした学年になると自主的に班の構成と巡るコースの検討や調査目的地の検討など予備調査で準備が忙しく行われるようになった。寮の先輩たちからのノウハウも得、ビザ申請にも必要な目的地や通過地への道路などの交通路を検討し、現地との連絡も取るなど雰囲気盛り上がりつつあった。柔道部など、体力に自信のあるメンバーは奥地への班を構成したりした。また衛生係や乏しい経費から旅費をやりくりする会計係、貴重な

経験を撮影するカメラ係、宿や食事を担当する交渉係などが班毎に決められた。

当初は日本人未踏地への大旅行であり、清国側の官庁や商店、会社、農民などからの聞き取りを行わざるを得ず、方言も多い中、機転を聞かせながらコースをたどり、各地の貿易品に足る生産品や流通、経済状況などを苦労しながら把握し、それが書院生の実力となっていた。やがて、調査報告書は卒業論文になり、卒業生が増えるに従い、各地の領事館や商社、新聞社、学校教員、満鉄などへの就業者が増え、彼らを通して都市部が中心ではあったがデータの情報入手が少しずつ可能になっていった。しかし、当時の清国、民国は農業国であり、書院生の歩くコースはほとんど農村であった。書院生もいわゆる地方出身者が多く、書院生と農民との間には、生活レベルの差は見られたものの、農民への理解や意思の疎通は比較的容易であり、書院生は各地で農民と交流し、それを通して書院生は清国、民国の農村に愛着も持ち、この国の理解者にもなった。宿泊地で多くの農民が書院生の持参する医薬品に期待して集まってきたことなどは、書院生が農村で受け入れられていたことを示している。清国、民国では支配者層やインテリ層が農民や農村を蔑視し、両者間の関係が極めて希薄であり、今日でもその状況があまり変わらないことからすれば、それに比較して、書院生と農民との距離はより近かったといえる。大旅行の成功はその点にもあったように思われる。

なお、体が弱かったり、健康を害して遠方への旅が困難な学生には、地元上海や北京、天津、南京などで駐在班としてテーマごとの調査研究をし、それも当時の数少ない大都市の調査を実現させた。

(3) 調査研究の発展

書院生の調査研究記録の中には、1人で美濃用紙数百枚をも記す労作もあり、各調査報告書は卒業論文としても認められていくが、そ

の調査研究テーマにも変化と発展が見られた。筆者はその過程を (A) 拡大型 (1907-1919)、(B) 円熟期 (1920-1930) (C) 制約期 (1931-1942) と設定した¹⁶。

簡単に言えば、(A) は書院生が日本人として未知の世界へロマンを求めるように踏査し、そのコースを一気に拡大した時期であり、東南アジアや満州へも拡大し、まさに進取の気性に富んだまさに冒険旅行で、コース沿いでの新世界の地理的世界と商業、商慣習、商業組織や貿易、経済などに焦点を集めて行われ、開学から数年間行われた修学旅行による商慣習を調査する班組織版の継承に近いところもあった。図3はこの時期と円熟期の一部を含むメーランド中心の大旅行コースを示した。コースから見ると、ほぼ全省それも主なコースはほとんど歩いており、このことから後に『支那省別全誌』を編集できる基礎が形成されたことがわかる。

(B) になると調査対象が、それまでのコー



図3 東亜同文書院生の大調査旅行コース (第5 (1907) ~23期 (1925) 生分のみ、またメーランドのみ示す)

スとそこでのテーマを主としながらも幅広い展開が見られ、各人のテーマも絞られるようになった。表2はそのように展開し始めた第17期から第21期までの調査対象別に調査地域を示したものである。調査対象は従来のテーマに加え、かなり幅広く、物産調査が多くなり、金を含めた経済全般の他、交通、移民や教育、飢饉などにも取り組み始めた動きを見ることがでる。ただし、直接的な政治および軍事問題は設立者近衛篤磨の方針から取り上げていない。こうして20期代から30期代初期にかけて、書院生の調査研究テーマは広がりを見せ、ビジネススクールの中に、アカデミックな雰囲気も現れ、それがやがて中国についての総合的研究の性格が付加されるようになり、のちの大学昇格への機運となっていったといえる。

しかし、(C) は1931年の満州事変により、民国政府は2年間、書院生へのビザ発行を停止したため、従来のような大旅行はしにくくなり、ビザ停止期間中は満州のみに限定され、従来の大旅行を夢見ていた多くの書院生にショックを与えた。3年目からビザは復活するが、反日感情の高まりもあり、従来のような大旅行は半分ほどに減少した。そして1937年の第二次上海事変では書院の校舎が退却する国民党軍によって放火され、図書や書院生が各地から集めた10万点に上る商品見本も消失した。

1939年の大学昇格後は、大旅行はゼミ単位となり、調査計画が立案され、従来の大旅行の伝統はの中で引き継がれることとなったが、国民党軍と地方軍閥軍、そしてのちに勢いを増す共産党勢力、それに日本軍の四つ巴の混乱の中、第42期生からは制度としての大旅行はできず、書院生有志個人の大旅行が行われたが、それも1942年にはできなくなった。書院が大学へ昇格すると、従来型の大旅行を始め、ビジネススクールとしての伝統の性格が薄まることに危惧を抱く卒業生や東亜同文会当局者もいて、書院の専門部が設立された。専門部では1943年までなんとか大旅行的な調査が維

持されたが、翌年には停止された。約半世紀にわたるこの大旅行はコース数は約700、参加した書院生は5000人近くとなり、膨大で世界最大級の調査と記録を残した（表2参照）。

そして1945年、上海での45年に及ぶ東亜同文書院および同大学、そしてその専門部は閉鎖された。しかし、敗戦を予測して最後の本間学長が1944年に富山県呉羽に設けた東亜同文書院呉羽分校は、日本からの最後の書院生を収容し、敗戦後も吉田茂外務大臣の許可により一時的に復活し、それが戦後の愛知大学の誕生へと引き継がれることになった。

表2. 第6期(1908)～第42期(1942)の各期別コース表(判明分のみ)

期 別	コース数	期 別	コース数
5 期	13 コース	24 期	15 コース
6 期	12 コース	25 期	15 コース
7 期	14 コース	26 期	19 コース
8 期	11 コース	27 期	17 コース
9 期	12 コース	28 期	19 コース
10 期	10 コース	29 期	25 コース
11 期	8 コース	30 期	31 コース
12 期	11 コース	31 期	26 コース
13 期	11 コース	32 期	22 コース
14 期	13 コース	33 期	25 コース
15 期	14 コース	34 期	29 コース
16 期	14 コース	35 期	30 コース
17 期	14 コース	36 期	21 コース
18 期	23 コース	37 期	28 コース
19 期	20 コース	38 期	31 コース
20 期	21 コース	39・40 期	38 コース
21 期	17 コース	41 期	(11)コース
22 期	18 コース	42 期	(3)コース
23 期	15 コース	合 計	662+(14)

(各旅行誌より作成)

4. 『支那省別全誌』全18巻と大調査旅行報告書

(1) 『支那省別全誌』全18巻の構成

すでに『支那省別全誌』全18巻刊行の意図やその背景などについてはすでに述べた。ここでは『支那省別全誌』全18巻としての編集内容を見て、そのあと大調査旅行の記録がどのように利用されたかについて検討する。

編集内容は章立ての構成からうかがえる。それを全巻で見ると、ほぼ共通の編構成が見られるので、その例をまず『浙江省』で見ると。浙江省の編構成は次の通りである。

第1編 浙江省概説

各章は、沿革略、面積・人口・人種、地勢・河川、気候、浙江省と外国関係の5章。

第2編 開市場

杭州、寧波、温州など3章

第3編 浙江省の貿易

概説、各3開市場の貿易統計の4章。

第4編 都会

富陽頭など36章。

第5編 交通運輸および郵電。

陸運、水路など7章。

第6編 主要物産および商業慣習

農産など5章。

第7編 工業および鉱産

製糸業など10章。

第8編 輸入品

概説、杭州の輸入品など4章。

第9編 商業機関および保険業

商業機関および度量衡など12章。

もちろん、各編を構成する章には多寡の差はあるが、その下に多くの節と項が設けられている。例えば、第7編の第1章である製糸業では第1節概況。第2節製糸原料（以下2項）。第3節生糸の種類及び品質（以下2項）。第4節製糸状況（以下3項）。第5節浙江各港の生糸輸移出統計（以下7項）となっており、きめ細かい内容となっている。

ここで示した編構成は、若干順序が異なったりするケースは見られるものの、基本的に各省で共通している。また他の省では「交通」関係の中にくくられている「郵便及び電信」を独立編にしたり（陝西省、四川省など）、「貨幣及金融機関」を独立編にしたり（四川省など）するなど、各省の実情に合わせた編構成も見られる。

編構成を見ると、最初に「概説」として、若干の沿革史、地形、気候や人口等が中心で、省によっては外国との関係、アヘンの状況などが付加されている。そして本題の始まりである第2編では外国貿易のために開放され、外国人の居住営業が認められた拠点である「開市

場」がまず取り上げられ、次いでこれらの市場の貿易状況が統計的に示され、各市場が特徴づけられる。東亜同文書院の目指したビジネススクールの本領が発揮されている。ただし、例えば陝西省のように内陸地にあつて開市場が存在しない場合は、つぎに「都会」（都市）へとスキップして展開する。ここでは省内各地域の中心地的な町まで拾い上げられており、『支那省別全誌』の大きな特徴になっている。次いで「交通」関係のネットワークが示され、その上で「物産や商業取引慣行」が述べられ、第一次産業中心の取引実践への糸口も示している。次いで「工鉱業」が同様に取り上げられている。そして「輸入品」が取り上げられ、貿易の実体とその特性を明らかにしている。それを受ける形で生産や取引に関わる「商業機関」（組織）が各地の都市、町ごとに示され、同郷人たちの商工会的な会館、業種別の組合的な公所、商務調査や商業知識を啓蒙する商会、仲介業の牙行（温州）、茶館、倉庫など、その多様な実体を書院生が各土地を這いつくばって調べた成果がまとめて示されており、これもこの書のオリジナルな大きな特徴となっている。最後は省によるが書院生の各省の土地ごとの「度量衡」の調査が詳細に示され、取引には不可欠な地域差の情報をうかがい知ることができる。

このように『支那省別全誌』はまさに清、民国時代における日本との貿易を意識した広範囲で、省別の現場に即した情報を与えたビジネス用の書であり、同時に当時の清、民国の経済、貿易の実態を示した書であつた。それはかつて東亜同文書院の構想と実現をはかった根津一が清国で貿易の可能性を調べ、日本に紹介した『清国通商綜覧』¹⁷の省別の書ともいえる成果であつたといえる。

(2)『支那省別全誌』を生んだ東亜同文書院生の大調査旅行記録

では、どのように書院生の調査報告書が『支那省別全誌』の各省に採用されたのであろう

か。

各巻の「凡例」にはどの旅行班の調査報告書が採用されたかが記載されており、各巻では、ほぼ合計5-10班におよぶ調査旅行記録が選択、採用されている。

① 陝西省の場合

例えば、『陝西省』の巻では、この時期に図4に示すように、陝西省内にいくつかの班が調査コースを設定しており、ほぼ省の全域をカバーするほどになっている。この巻ではそれらのほとんどに当たる合計9班の調査報告書が採用されている。このような方法は、すでに第2期生から第4期生が修学旅行的ではあったが、きちんとした現地での調査実習の報告書をベースに『支那経済全書』全12巻の編集刊行が行われており¹⁸、その経験を踏襲したものといえる。

『陝西省』で採用された合計九つの班の調査報告書は次の通りである。いずれも陝西省を主に調査研究した班や陝西省もコースの一部

として調査研究した班の成果である。

1. 「陝西河南班」第5期生、調査年は明治40年（1907）
 2. 「晋秦班」第7期生、調査年は明治42年（1909）
 3. 「甘肅鄂爾多斯班」第8期生、調査年は明治43年（1910）
 4. 「清化鎮漢中班」第9期生、調査年は明治44年（1911）
 5. 「甘肅四川班」第11期生、調査年は大正2年（1913）
 6. 「秦蜀班」第11期生、調査年は大正2年（1913）
 7. 「陝西班」第13期生、調査年は大正4年（1915）
 8. 「河南山西班」第14期生、調査年は大正5年（1916）
 9. 「湖北四川班」第14期生、調査年は大正5年（1916）
- そのうち、例えば、「清化鎮漢中班」のコー

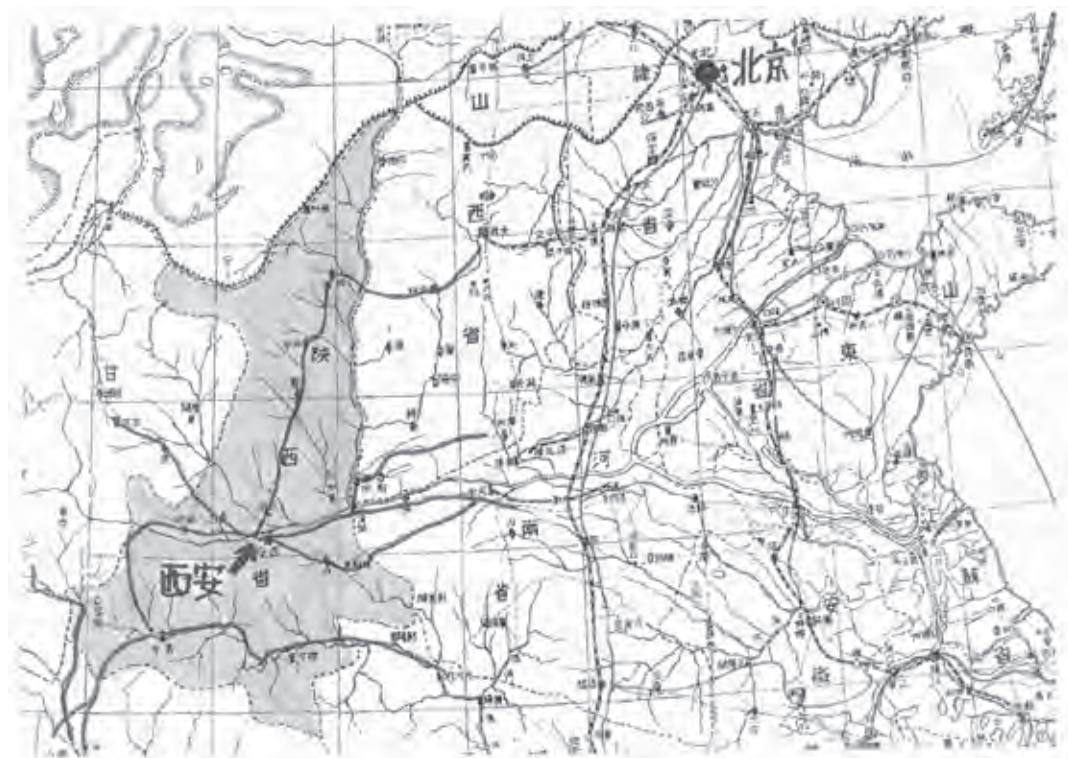


図4 「陝西省」での第5期（1907）から第14期（1914）生による大調査旅行コースの図

スを示すと図4の軌跡となり、全行程4カ月あまりのうち2カ月あまりを陝西省の中心地域である中部から南部を縦横断してカバーしている。そして「陝西班」の場合の調査報告は「湖北、陝西、四川調査班」の報告書の中から陝西省部分が採用されている。その内容は、「地理」、「商業機関」、「物産」、「農、工、鉱業」となっており、それらがほぼそのまま採用された。

また、「湖北四川班」の調査は「湖北、山西及び陝西省」の中での陝西省部分が採用されており、その内容は「地理」、「都会」、「金融機関」、「貨幣及び度量衡」、「物産」となっており、かなり共通しつつこの両者間でも補完し合うように採用されている。その編纂には主に山崎良吉が行い、松本良男、清水薫三他も協力したとあり、多くの報告書の接合、補完が行われたことがわかる。ただし、ベースはほとんど書院生の調査報告に依拠しており、新たな資料を発掘して多くを加えたわけではない。その点では書院生の苦労の中で作成された調査記録のみから構成された成果だといえる。

② 四川省の場合

次の『四川省』の場合は、以下に示す9班の調査記録が採用されている。

1. 「長江班」第6期生、明治41年（1908）
2. 「西鄂巴蜀班」第7期生、明治42年（1909）
3. 「雲南四川班」第8期生、明治43年（1910）
4. 「湖南四川班」第9期生、明治44年（1911）
5. 「四川班」第9期生、明治44年（1911）
6. 「甘肅四川班」第11期生、大正2年（1913）
7. 「秦蜀班」第11期生、大正2年（1913）
8. 「雲南班」第12期生、大正3年（1914）
9. 「湖北四川班」第14期生、大正5年（1916）

四川省は雲南省とともに書院生にとってあこがれの旅先であった。しかし、上海からは遠く、柔剣道など体力のある班が長江を上り、率先して出掛けた。また、海路安南（現ベトナム）

からフランスの鉄道で昆明へたどり着き、北上するコースもみられた。図5はこの時期までに四川省に入った班のコースを示した。西部の山岳地域を除くとほぼ全域を縦横断してカバーした結果になっている。ちなみに、12期生の「四川班」は長江を上り下りする四川へまっしぐらのコースであった。すなわち、6月29日上海出発、7月13日三峡を経て、8月4日に四川省の入り口である万県到着、同月10日まで調査などで滞在、8月20日には広安着、そして9月15日から27日まで省の中心地である成都に滞在して調査を進め、さらに奥地へ進み、チベット世界の中心地である打箭爐では10月22日から27日まで滞在し調査を行っている。帰路は長江を下り、11月4日から2週間、長江の要衝の地である重慶で調査などを行い、12月5日再び万県へ、そして武漢へも寄り、年末に上海へ戻っている。半年間におよぶ大調査旅行であった。

その調査報告書の中から四川に採用された「湖北四川班」を見ると、「湖北、陝西、四川班」の調査報告の中から四川省部分が採用されている。その内容は、各地の「地理」、「同地理」、「商業機関」、「物産」、「農、工、鉱業」の調査報告となっており、ほかの班の調査内容とも共通する。大調査旅行の調査報告書はこのように各班とも大きく共通する形でまとめられており、それが『支那省別全誌』の基調となることがわかる。

なお、その具体的な内容のごく一部として、『四川省』の目次の一部を資料2として示す。内第7編は書院が重視した一つの物産関係のうち、農牧林業と生糸を取り上げた部分である。書院生たちがかなり詳細にその実態をリアルに調査したことがわかり、そこに大きな価値を見いだすことができる。



図5 「四川省」での第5期(1907)から第14期(1914)生による大調査旅行コースの図

③ 江蘇省の場合

つぎに東亜同文書院のお膝元であり、国際化最前線の上海や民国期には拠点となる南京を含む江蘇省について見てみる。

江蘇省はこの時期には経済活動も活発であり、それに伴う交通網の進展、人口の集中など国の新しいセンターになりつつあった。そのため、書院生も注目し、また、遠隔地へ出掛けられない体の弱い書院生も、上海駐在班として調査研究をできたため、上海を中心に江蘇省の調査を充実させることになった。その調

査旅行コースを示したのが図6である。多くの班が上海から出発しており、上海から南京周辺は図示した以上に通過したコースは多く、記録も多い。

その結果、『江蘇省』に収録された調査記録は次の合計19班分の多数に及んだ(表3)。そのうち、収録された上海駐在班は合計4班を数える。その調査内容を第13期生の「上海」調査報告書から見ると、「上海の起源」、「上海における倉庫業」、「上海における銭荘業」、「上海における法人の事業」、「上海における綿糸」、上海における陶磁器」、「上海における肥料」、「滬杭、蘇、湖航路」などの調査報告が並び、のちの東亜同文書院の上海研究にも寄与することになる。

そのような調査報告書から編集構成された『支那省別全誌』の第15巻『江蘇省』の目次構成とそれぞれのボリュームを示したのが表4である。それによると、各編の構成とその順序は他の省とほぼ同じであり、『支那省別全誌』

表3 『江蘇省』のベースになった調査報告書

1 第5期生	淮甯河班、上海班	(1906年 明治40年)
2 第6期生	上海班、津浦班	(1907年 明治41年)
3 第7期生	兩江班	(1908年 明治42年)
4 第8期生	海關班	(1909年 明治43年)
5 第9期生	江蘇山東班、江寧武昌班	(1910年 明治44年)
6 第10期生	江陰廈門班、鎮江寧波班	
	通州濟南班、南京天津班	(1911年 明治45年)
	江蘇安徽班	
7 第11期生	津浦京漢班	(1912年 大正2年)
8 第12期生	上海駐在班、安徽河南班	(1913年 大正3年)
9 第13期生	上海駐在班	(1914年 大正4年)
10 第14期生	江蘇直隸班、江蘇山東班	(1915年 大正5年)

表4 『支那省別全誌』のうち『江蘇省』の編別章の数とページ数

『支那省別全誌』	章の数	ページ数
1 省の総説	5	24
2 開市場	4	95
3 貿易	5	29 <small>―個別統計が主</small>
4 都會	42	83
5 交通・運輸・郵便	5	180
6 主要物産・商業慣習	4	187
7 工業	6	263
8 輸入品	3	171 <small>―鋼鐵、砂糖、石膏、鹽、石油、海産、木材</small>
9 商業機關(上海)	7	74
10 金融貨幣・度量衡	18	115

〔江蘇省より作成〕

の基本方針がここでもうかがわれる。しかし、各編のウェイトは上海の特性が表れ。各編の章の数とそのページ数の差になって表れている。

すなわち、第1編の総説では沿革の概略、面積、人口(約100万人)、地勢、河川、気候、外国との関係が簡潔に述べられ、ページ数は最も少ない。だ第2編の開市場では上海、南京、下関、鎮江、蘇州が取り上げられ、特に上海はこのうち最多のページ数を占めている。一般的な総説以外に港湾、租界行政、交通機関、主要な役所、学校、博物館、図書館、寺院、協会、食品市場、旅館飲食店、言論機関、印刷業、名勝と娯楽場、貿易、衛生状態、飲料水などがか

なり詳細に記載され、上海の日本人は1915年当時共同租界内に7,189人、フランス租界内に218人の計7,407人で、イギリス人の5,521人を抜いて第1位を占めていたことがわかる。学校では東亜同文書院が真っ先にあげられ、次いで上海商業、滬上青年会夜学部、上海女学校と続き、あと滬江大学、震旦大学などミッション系大学が4校並び、同じくミッション系の専門学校4校が続く。民国側では交通部上海工業専門学校(のちの上海交通大学)ほか7校が、最後に上海日本人小学校が並んでいる。第3編の貿易は開市場ごとの公表されている全体的な貿易統計でページ数は少ない。第4編の都會は開市場以外の県城中心の町が一覧されていて、書院生の現地で観察した記録や絵地図が盛り込まれている。

次の第5編から第8編までは最も力が入られた編集になっており多くのページを占めている。交通では陸路、鉄道、民船、汽船、小蒸気船が地区別に述べられているのが特徴である。主要物産では米、綿花、養蚕業と繭、茶が取り上げられ、工業では綿紡績、綿布、織布、生糸、絹織物などの勃興した繊維産業が中心



図6 「江蘇省」での第5期(1907)から第14期(1914)生による大調査旅行コースの図

的に取り上げられている。輸入品では実に多様な品目が一覧され、特に上海のそれが際立っていることがわかる。第9編の商業機関としては商業会議所、商工会、会館、公所、茶館、仲立ち業、問屋買弁、株式取引所、倉庫業など多岐にわたる商業組織がまとめられている。最後に第10編の金融貨幣と度量衡が地域別にあげられ、章の数も多い。当時は貨幣の統一ができておらず、さまざまな金融機関が両替中心に機能していた様子がわかる。いずれも書院生による現地調査の成果である。

④ 他の若干の省

そのほかの省についても逐一述べたいところであるが、紙幅に限度があり、全部をカバーすることはできない。すでに見たように各省とも編構成はほぼ同じように編集されており、比較ができるようになっている。そのさい重要なのは、各省をこれだけのパワーで編集できたそのベースとなった書院生の大旅行記録の実績である。それは各旅行コースになって現れているので、ここではその若干を確認す

る形で紹介するにとどめる。

図7は湖南省と福建省における書院生の大調査旅行のコースを示した。それによると両省とも多くの班が、コースを刻んでいることがわかる。湖南省はこの時代直前までは、上海からはもっともアクセスがしにくく、鎖国的な省であるとされていた。省の中央を占める広大な湖が季節によって大きさを変え、船でのアプローチが容易でなかったためである。そのため宣教師による教会もできず、宣教師たちも排斥された。それに風穴を開けたのが、日清貿易研究所の卒業生である白岩龍平であった。白岩は日清汽船会社を経営する中で、上海と湖南省の省都長沙とを結ぶ航路を開設した。それによって湖南省は外の世界とつながったのである。書院生たちもその旅行で恩恵を受けたことがわかる。一方、福建省は台湾海峡に面し、古くから外の世界とつながり、東南アジアへも多くの華僑を送り出してきた。福建省へのアクセスは書院生にとっても容易であり、広東や東南アジアへ出掛ける拠点にもなった。



図7 「湖南省」と「福建省」での第5期(1907)から第14期(1914)生による大調査旅行コースの図

こうして『湖南省』¹⁹では第5期生から第14生期までのうち合計11班分の調査記録が収録された。第14期生は当時新設された書院農工科の湖南班調査記録も収録され、総ページ数も千ページを超えるほどである。一方、『福建省』²⁰ではやはり第5期生から第14期生にかけて実に合計13班分もの調査旅行記録が利用収録され、ページ数も千百ページを超えている。

(3)『支那省別全誌』から経済圏形成の萌芽を見る

① 伝統的な経済圏

以上『支那省別全誌』の全体像を個性にも言及しつつ明らかにしてきた。基本的には、各省を単位とした経済地誌であり、ビジネススクールの書院がまさに目指した方向でもあり、その成果であったとすることができる。前述した湖南省の例を見るまでもなく、そこには省単位でまとまる自給的独立地域としての省の存在が色濃く見受けられた。とりわけ内陸部の省はその傾向が強く、折しも辛亥革命後の混乱の中で、ほぼ省単位をベースにして軍閥がそれぞれ省を支配したことはそれを裏付けている。大きく見れば、古代から南北の争

いがあったが、奥地と平原の東西の争いもあった。しかし、そのような中でもそれらのベースには伝統的に省単位のまとまりがあり、省間の争いは民国成立期の軍閥時代に一举に吹き出している。それほど省単位の持つ意味は大きかったのであり、書院がそれを省単位で『支那省別全誌』としてまとめた必然性は十分にある。

そのような中で、19世紀後半から列強の進出が見られると、経済的な側面から省単位の厚い壁にも変化が現れた。フランスが雲南を安南とつなげようとしたように、列強諸国は外部的な経済合理性を先行しつつ切り込んでいったため、伝統的な省単位という枠は列強には重要ではなかったからである。列強による各地での開港要求もそうであった。各地での開港はその後の省を超える経済圏を生み出すことになっていくことになる。

そのような動きが、この『支那省別全誌』にも見いだすことができるだろうか。本稿では、そのもっとも可能性のある列強進出の拠点である上海・江蘇省やその隣接省に注目し、動きが出るはずの物流を追いかけてみた。それが図8-1と図8-1である。図8-1は総民船数と小回

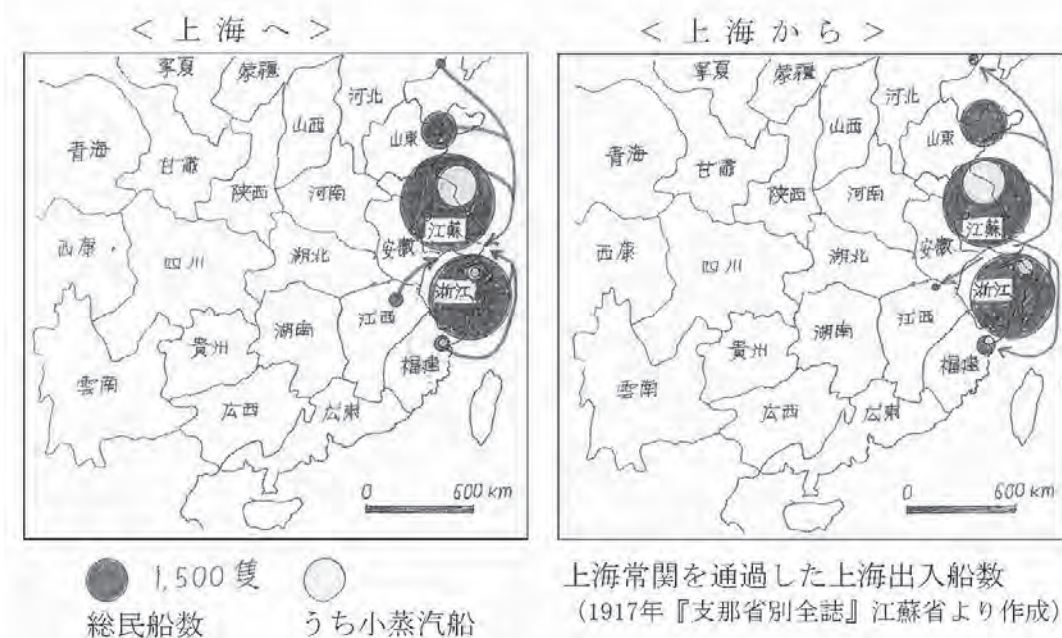


図8 上海・江蘇省を中心とした20世紀初期の船舶による物流の図(左は図8-1、右は図8-2)

りのきく小蒸気船の分布とそれらの主な動きを示した。その数は長江下流域の江蘇、浙江が主で、山東は少ない。それらの動きを見るといづれも実質的に上海への物資の運搬船であり、地元経済と密着した上海を巡る国内的で局地的な経済圏の形成が見られる。

図8-2は税関がらみの船数とその移動方向を示したものである。物資を国内の各地域にどのように運んだかがわかる。両図を見ると両者は上海を起終点とする表裏一体の関係を示しており、まだ極めて局地的ではあるが、形成されつつある上海の港勢圏の一断面を示したものと見える。

図9-1と図9-2は、より具体的に上海への輸入品の転送先と、上海への移入品の転送先を示した概念図である。これによると、いったん上海に集まった輸入品と移入品がほぼ同じ動きをする形で動いており、特に長江流域に地域間交流的な経済圏が伸びており、その先端は四川省の重慶ともつながろうとしていることがわかる。中でも移入品は長江流域と強い出入関係が形成されていることもわかる。これも航路の整備によるところが大きい。一方、輸入品は長江流域以外にも東支那海沿いの山東や河北にまで及んでいる。これは開港地の中で上海の優位性が背景にあるためといえる。

いずれにせよ、この時期、上海を中心にしてまだ局地的ではあるがいくつかの省を超えた経済圏形成という新しい動きが始まったとみることができる。

5. 『新修支那省別全誌』と大調査旅行記録

(1) 『新修支那省別全誌』9巻（で中断）の構成と編集方式の変化

『新修支那省別全誌』の9巻目『青海省・西康省』が、終戦直後の1946年（昭和21年）に出版されたことは、先に述べた通りであるが、これは本文1,018ページ、索引37ページという第6巻『陝西省』の1,242ページ、索引38ページに次ぐ大作であった。しかも1ページあたりの文字数は『支那省別全誌』が476文字であるのに対して、この『新修支那省別全誌』は800文字であり、実に68パーセントの増量となっており、地域の情報量は格段に増えている。それだけに日の目を見ずに幻となった残る13巻の消失による損失は今後の中国研究にも影響を与えるように思われる。この間のメインランドの変貌する姿の記述への期待があったからである。また、刊行された9巻は、メインランドではなく、『支那省別全誌』では十分にカバーしきれない部分もあった辺境地域からスタートしたことが特徴であることも述べた。その点はこ

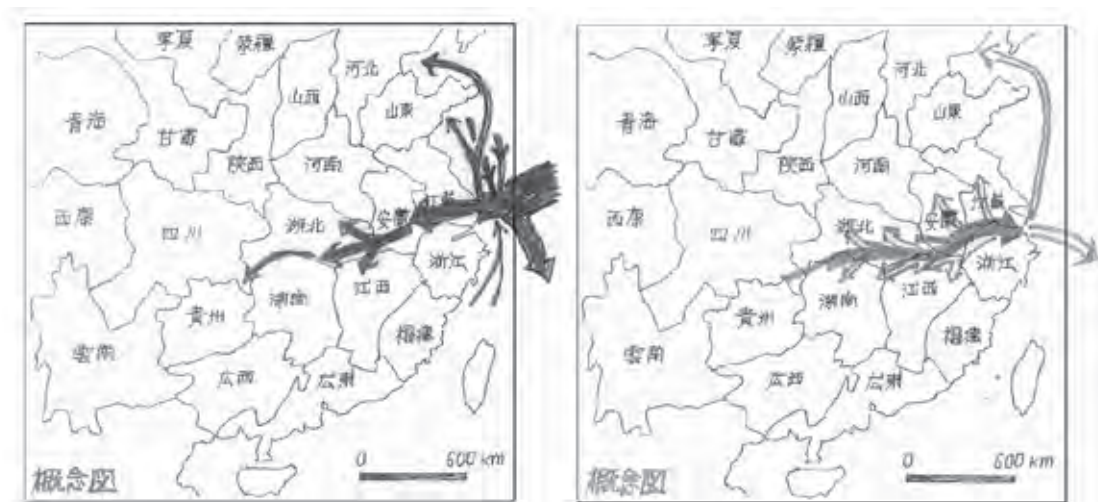


図9 1915～1917年における上海への輸入品の転送先（左の図9-1）と移入品の転送先の概念図（右の図9-2）（『支那省別全誌』江蘇省より作成）

れも貴重な記録となった。現在の中国において、このシリーズを含む東亜同文書院の調査研究の成果が影印本で次々に刊行された事は、これまで日本帝国主義下のものとして無視しようとしてきた態度が一変するほど、その価値を無視できなくなったためと思われる。わが国でも戦後、新中共政権に見習い、内容も見ずにイデオロギーによる蓋をしようとしてきたような一部の研究の流れが変わり、今後再評価の方向へすすむように思われる。

ところで、この出版の趣旨などについては前述したので、ここでは繰り返さない。

ここでは編成の内容について触れる。まずは米内山が編集責任者であった第1巻から第3巻の四川と雲南両巻の内、『四川省』について見てみる。編構成は次の通りである。

第1編 総説	54ページ
第2編 交通	64ページ
第3編 都市	342ページ (以上第1巻)
第4編 産業	502ページ
第5編 経済	103ページ
第6編 歴史及び名勝	223ページ
索引	42ページ (以上第2巻)
合計	1738ページ

『支那省別全誌』と大きく異なる特徴的な点は、前述したように第2編に「交通」が配置され、ここでは書院生の実地踏査のコース記録や多様な交通ネットワークがふんだんに用いられ、また、道中に訪ねた省城や県城、分県の町などの記録もふんだんに生かされて記録されていることである。その両方で次の産業や経済のページを上回っている。そして第6編の「歴史及び名勝」はこれも200ページを超える。これは米内山庸夫も四川へ出掛けて歴史的遺産の調査をしたことがあり、四川省を熟知していたことを反映しているといえる。四川省の産業や経済は重慶が拠点性を持ち始めた段階であり、調査記録の内容が疎であるわけではない。全体としては、米内山の編集者として

の書院生の記録を生かそうとする個性が出ているといえることができる。第3巻の雲南省についても同様である。しかし、『支那省別全誌』のように、どの旅行記録を利用収録したかについては米内山も馬場も明示していない。これは編集作業に関わった前述の吉本が述べているように、『新修支那省別全誌』の編集に当たっては、書院生の旅行記録を省別に分解して整理し、作業を進めたとしており、そのことが影響している者と思われる。

次に米内山に代わって馬場鋏太郎が編集者となった第4巻以下の編構成を見る。ここでは馬場鋏太郎が最初に手がけた第4巻「貴州省」の編構成を見る。

第1編 自然環境	
地理的特相、気候、動植物	80ページ
第2編 人文	
沿革、行政制度、民族と文化、経済建設行政	378ページ
第3編 都市	
総説、省都、重要都市・集散地	249ページ
第4編 産業資源	
農産、林産、畜産、鉱産、水力、薬	232ページ
	[以上 上巻]
第5編 工業	
総説、繊維、化学、油脂、製粉、窯業、嗜好品、食品、冶金、印刷、電気	70ページ
第6編 商業貿易	
省界商業、特殊商事行政機関	108ページ
第7編 財政金融・度量衡	
財政、貨幣・金融、度量衡	102ページ
第8編 交通運輸 付郵政電政	
総説、陸路交通、水路交通、主要通路紀行、鉄道、郵政電政及び航空	238ページ
第9編 歴史及び名勝・古墳	81ページ
索引 両巻で	58ページ

編集長が馬場鋏太郎となった最初の『貴州

省』(上下)²¹の編構成とそれによる省構成も示した。特徴的なのは、第1編に自然地理の構成を示し、専門家も含め、地質や動植物も含め、より一般的な地理書に近づけた点である。それは次の第2編の人文地理分野にも見え、馬場が得意とする行政制度について詳細に説明している。また、貴州省に見られる多様な少数民族についても専門家の手で民族文化にも言及し、方言研究の成果も紹介されている等、書院生の調査の弱い部分の幅を広げている。

そして編構成での大きな変更は、第3編が「都市」へ移り、前3巻までの米内山が編集した際には、ほぼ巻頭に持ってきた書院生の旅行コース記録を巻末の第8編に下げ、編集を大きく変えた点にある。そこには米内山が目指した書院生による記録を前面に打ち出す編集から、自ら経済地理学を書院で講じてきた経験から、少しでも地誌学の体系に近づけ、それなりに学問的にも書院の成果を高めようとする馬場鍬太郎の気持ちがそうさせたように思われる。

それは具体的には各編に編集担当を設け、

本書の編纂に当たっては、『支那省別全誌』各巻の内容をして可及的画一ならしめんがため、編集長において予め細密なる編集標準目次を作成して、これを「支那省別全誌刊行会総務委員会」に提出し、その承認を経て、以て編集基準を定むると共に、一面また編集員各自が執筆するの便に資する事とした²²

ということからもうかがわれる。各編集担当は書院生のカバーしきれない部分は書院教授の他何人かの専門家を登用したほか、資料収集にもいくつかの機関や馬場の息子で書院卒の馬場滋の手も借りている。それでも巻末の書院生による調査旅行コース記録は最大限生かしてはいる。とはいえ、米内山の比較的書院生中心の成果を重視した『新修支那省別全誌』は、第4巻から地誌学としての形式化を進

めた馬場の『新修支那省別全誌』へと転換したといえる。

(2)『新修支那省別全誌』から奥地の経済圏形成を見る

『新修支那省別全誌』は残念ながらメーランドの各省が戦禍によって中断未完に終わってしまった。刊行されたのは周辺の省である。従ってこの時期の中心地域と周辺地域の関係の実態や動きを把握することは極めて難しい。しかし、そんな中で周辺の省を読み解くことでそれに迫る可能性はある。以下はその一例である。

周辺の省はほぼ20年前の『支那省別全誌』との比較はできる。そこでその比較の中での変化が目立つ四川省、そのうちでも特に重慶に着目して物資の移動量を移入品と輸入品に分けて概念図で示すと図10のようになる。

すなわち、移入品が周辺の省のデータともチェックすると、隣の貴州や雲南、さらに北接する乾燥地域の陝西省や甘粛省からも入荷が見られ、重慶が長江流域奥地の中心地になりつつあることがわかる。また輸入品も下流の上海から遡上して漢口などを中継地として重慶までたどり着くようになってきており、下流の漢口を足場に重慶が交易の拠点になりつ

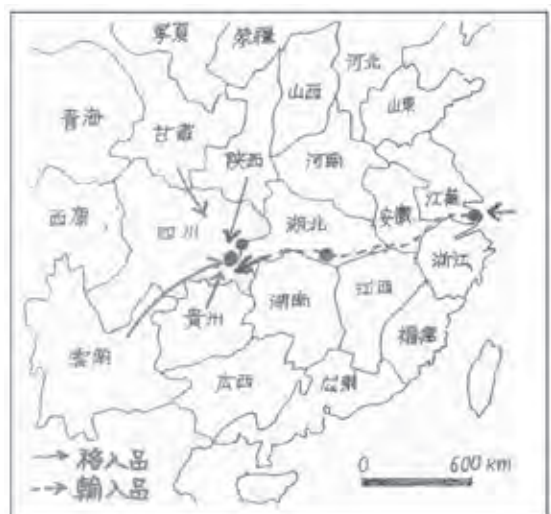


図10 1930年代の入超増大する「四川省」における輸移入コースの概念図 (『新修支那省別全誌』四川省より作成)

つあることが把握できる。これは少し前に山峡を汽船で遡上できる航路の開発がすすんだため、それにより、曳船時代からの制約が少なくなり始めたことと関係がある。しかも移入品から見れば、あわせて重慶の後背地が奥地一帯に形成されつつあり、かつての陸の孤島的な位置に大きな変化が進展していることを知ることができ、重慶が重要な拠点になる条件が形成されつつあることもわかる。その先駆けは『支那省別全誌』の中のデータ（前掲図9-1、9-2）で初期の状況を示すことができたことからすれば、その後、この動きが加速していたことが裏付けられる。大きくは下流上海を拠点とした長江流域経済圏の形成過程を示しているといえる。その一例ではあるが、このように『支那省別全誌』と『新修支那省別全誌』は、地域の特性や動きを分析する上でも活用することに十分価値があるといえる。

6. 『支那省別全誌』と『新修支那省別全誌』との関係

以上、両誌をそれぞれ取り上げてきた。そこで最後に両誌の比較を編構成から見てみる。そこに時代の動きや観点の変化も見られるはずである。ただし、個々の内容の変化については別稿を予定したい。ところで、『新修支那省別全誌』は計9巻で中断したが、省としては7省分であり、直接比較できる省は限られる。そこで前述して取り上げた省との関係から、「四川省」と「陝西省」を事例として取り上げる。

(1) 『四川省』の場合

まず図11により、『支那省別全誌』から『新修支那省別全誌』への『四川省』の場合の編構成の変化をページ数とともにみてる。それによると、いくつかの編が集約されているが前書の第3編の「貿易」を後方の第5編「経済」に移したほかは、特に大きな変化は見られない。

したがって、『支那省別全誌』の『四川省』は、大筋は省についての概説のあと、貿易の開

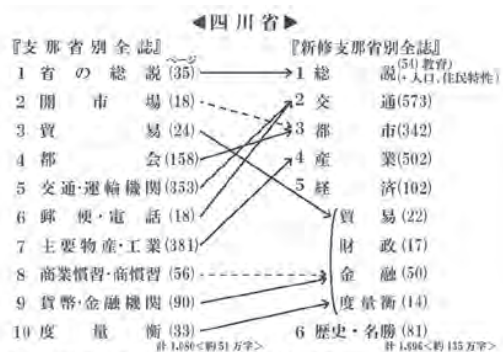


図11 『支那省別全誌』と『新修支那省別全誌』における『四川省』の編構成の変化 (両全誌より作成)

港場から貿易へと貿易関係からスタートし、書院の日清間の貿易実務者養成という設立目的に沿う方針が明確である。ここが一般的な地理書とは異なっている。しかし、ページ数から見ても当時の四川省の貿易関係は極めて弱小であった事がわかる。後に貿易の拠点になっていく重慶もまだその機能は弱かったし、奥地の成都は機能がほとんどなかった事がわかる。四川省の位置が外部からは極めて遠く、しかも三峡の交通上の壁が厚かったといえる。第4編になって、省の伝統的な内部へ入り込んでいく。重慶も県城もまだ伝統の中にあった。そしてそれらをつなぐ交通網と手段が書院生の記録から編まれ、ページ数は多く、初めて知られる奥地の省の実態を示すことに重点が置かれているといえる。幅広くカバーされているが、書院生の思い思いの記述がベースになっており、その面白さと共に記述の濃淡差も見られる。郵便電話の導入はまだ始まったばかりであった。

次いで、物産と工業ではもっとも多くのページをとっている。これも貿易品を調査する書院大旅行の成果であった。商品見本も持ち帰り、書院の商品陳列館を飾ることになる。今は消滅した伝統工芸品も記録されている。そして最後に、書院の調査目的である商業組織や商慣習が記録されている。当時は四川省には日本人はほとんどおらず、書院生たちは異なった方言の中で、漢民族や少数民族から聞き取りを行い、資料を集める苦労を踏まえた

成果である。そしてそれを支える貨幣と金融機関の調査の成果が続く。前述したように、当時は統一貨幣がなくさまざまな貨幣が各省で流通しており、貨幣間の両替が金融業を支えていた。書院生は全国でほぼ通用する小銀をつなげ、それを会計係が体に巻き付けて歩いた。もちろん各地での両替は必要であった。最後の度量衡も各地で異なるため、書院生の調査の成果である。

一方、『新修支那省別全誌』の『四川省』は米内山がさらに蓄積された書院生の成果を前面に押し出して編集したことは前述したとおりである。それは第1巻上巻の構成において、『支那省別全誌』では5-6番目に置かれていた「交通」が第2編に上げられていることに顕著に表れている。それは読み手が大旅行をしているかのような感覚を味わうことができるほどで、上巻の過半を占めるという思い切った編集である。次の「都市」も『支那省別全誌』に比べて書院生による情報量は2倍以上に増え、しかも交通路単位にまとめられ、「交通」との筋を通してしている。そしてもう一つの本題ともいえる「産業」は下巻の7割近くを占め、書院生の成果を示している。『支那省別全誌』では各地の特産品としてのまとめを示したが、個々ではそれを業種別に再編し、前書との差別化を図る工夫も見られる。続く「経済」の中の「貿易」はまだ地域内交易が主である。折からの「満洲国」独立も域外交易を萎縮させている。そして終章の「歴史・名勝」は新たに付加された省で、米内山の文化理解があって生かされたものといえ、これによって各省に重み加わった。現代の観光資源ともいえる領域も加えた点は画期的であったといえる。

全体としてみると『新修支那省別全誌』は『支那省別全誌』の1,080ページが1,696ページへと増え、さらに1ページあたりの可能文字数で見ると、51万字が135万字に増えており、格段に情報量が増え、充実したことがわかる。それは大調査旅行の充実の反映でもあった。

(2) 『陝西省』(第6巻)の場合

図12は『四川省』と同様に、両『陝西省』の比較を示した。

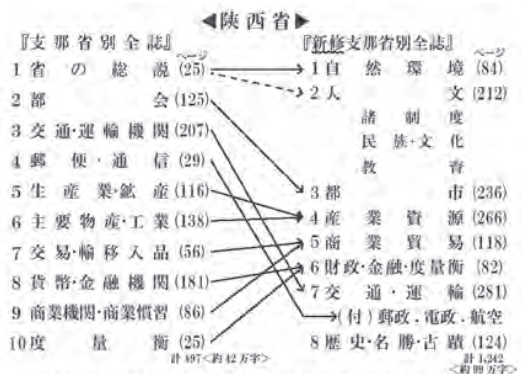


図12 『支那省別全誌』と『新修支那省別全誌』における『陝西省』の編構成の変化 (両全誌より作成)

『四川省』に比べると各編の構成がかなり変化している。『支那省別全誌』の構成は『四川省』とは大きくは変わらないが、「新修」の方は『四川省』のそれとはいくつかの点で変化している。その最大の変化は、『新修支那省別全誌』の『四川省』では「交通」編が第2編に配置され、書院生の大調査旅行のリアルが全面的に打ち出されていたのが、この「新修」の『陝西省』ではそれが末尾の編に置かれ、書院生の大調査旅行のリアル感が後退している。また、『支那省別全誌』の10編を7編に集約し、新たに「歴史・名勝・古蹟」の編を付加した構成になっている。

このような変化は、前述したように、第4巻以降、編集者が米内山から馬場に交代したことによる。両者ともに書院の卒業生であるが、米内山は民国の各地を歩き、文化遺産にも高い関心を持った人物で、幅広い見識を持った研究者であった。一方、馬場は書院で経済地理学を講じ、その体系化を目指した研究者であった。馬場は米内山の編集が書院生のリアル感中心であることに、馬場流の学問からはズレを感じたのであろう。地理学書、地誌学書としてこの省別全誌を世に問いたいと緻密に目次を造り、その枠に当てはめたのがこのような差になったといえる。もちろん、書院生の大旅行コースのリアル感は第7編で見られるが、

多分に文章が平準化され、手が加わっているとともに、馬場が得意とする交通機関の記述も多い。

編構成を見ると、『支那省別全誌』での総説に相当する内容は、『新修支那省別全誌』では自然環境と人文とに区分され、地誌学の体系をとっている。そのために何人かの専門家にも協力してもらうことでレベルアップをはかり、「人文」は200ページを超えるウエートを占めている。その延長で「都市」情報へ展開し、次の「産業」ではさまざまな資源にも触れ、書院生の成果も使いながら260ページ余りを費やしている。「商業」では、もともと活動があまり活発でない省だけに若干の市場都市を中心に上げ、「財政」では財政政策の視点でまとめられている。「歴史・名勝・古墳」は周代以降の多くの遺産や寺院などまとめて紹介されているのは特筆される。

前巻とのページ数を比較すると、897ページが1,244ページへと大幅に増え、文字数では42万字が99万字へと倍増し、この巻も情報量が著しく増加している。同じく、その多くは書院生の調査旅行記録の蓄積によるものである。

7. 終わりに

以上、『支那省別全誌』全18巻と『新修支那省別全誌』(9巻で中断)と東亜同文書院生の大調査旅行との関わり、および『支那省別全誌』と『新修支那省別全誌』それぞれが示す編集方針とそこで描かれる清末および民国期の各省の特性および省を超えた動きについて検討してきた。その検討結果をここでまとめることにする。

(1) 『支那省別全誌』全と『新修支那省別全誌』

は当時であって世界でも例を見ない世界初の優れたいわば省別地誌として編纂された。うち『支那省別全誌』(1917-1920)は全18巻として各省をカバーしたが、奥地の新疆と青海については独立省として編まれずに、前者は陝西省、後者は甘粛省

の付録部分として編集された。

- (2) このような編集、出版が可能であったのは、1901年に上海に設立された東亜同文書院が、日清貿易を発展させて清国に進出する欧米列強に経済的に対抗しようとする荒尾精と、日清間の教育文化交流を目指した近衛篤磨、それを実践的に支援した根津一らによるグローバルな観点からのビジネススクールとしてスタートし、清国での貿易品調査のフィールドワークとその記録が書院生の手によって進められ、成果が上がったためである。そのモデルは当初、清国の主要都市で書院生たちが行った全国での商取引慣習調査や経済調査をまとめた『支那経済全書』全12巻にあった。書院生たちの調査記録原稿がそのまま丸善から出版された。その後、1907年以降10年あまりの調査記録の原稿20万ページが18省別に編集されたのである。書院生の調査は書院生たちの計画で実施され3カ月から長くて6カ月に及ぶ徒歩の大調査旅行であった。そのため、遠隔地の新疆や青海は調査が難しく、一部にとどまったため、隣接の省の付録として編まれたのである。
- (3) その編集には、東亜同文書院の経営母体である東亜同文会があたり、東亜同文書院教授を退職した大村欽一らを中心に編集が行われた。内容的には、総説、開市場、貿易、都会、交通運輸、主要物産と商慣習、鉱工業、商業機関、金融貨幣度量衡、という構成でほぼ統一された。書院のカラーを出したいわば経済地誌書である。各巻とも書院生の調査記録が合計5-6本から10本ほど採用され、編集された。本邦はもちろん、民国、欧米においても初めての成果であり、書院の名を高めた。
- (4) 一方、『新修支那省別全誌』(1940-1946)は、さらに20余年後、再び膨大に蓄積された大調査記録を活用すべく全22巻として計画編集された。特に1920年代から1930

年代前半期は書院の全盛期であり、大調査旅行ももっとも熱が入って、調査分野も貿易、商業、経済以外の教育、文化、歴史、災害などへも広がった。そのため前回遠隔地の省が手薄になった反省から、遠隔地の省から編集出版することも可能になったのである。その際、より完璧を期するため、経済のみならず、文化、歴史も含めようと、その分野の専門家も加えて執筆がなされ、より高度化された。しかし、戦争が激しくなる中、東京空襲でメーランド各省分の組まれていた紙型が失われ、第9巻で刊行が中断された。9巻目の青海・西康省は終戦直後の紙事情最悪の時に出版されており、計画遂行の意地を見せるものであった。

- (5) この『新修支那省別全誌』うち第12巻から第3巻の四川、雲南各省は書院卒業後に外務省に入り、民国時代に各地を訪れ、歴史文化の分野にも著作を刊行した米内山庸夫が編集長となり、書院生の記録をライブで生かす工夫をしたため、一般の地誌書とは異なった画期的な構成と内容になった。しかし、第4巻以降は、書院卒で経済地理の書院教授を務めた馬場敏太郎が上海から帰国して編集長になり、米内山方式をやめ、自分の研究成果も取り入れ、伝統的な地誌書としての色合いの濃い編集を強めた。そのため、書院生のライブ感ある記録は採用されつつも抑え気味となった。しかし、文字情報量は全巻とも『支那省別全誌』各省の2倍以上に増え、内容の幅も広がり、決定版的な充実がはかられた。
- (6) このように『支那省別全誌』と『新修支那省別全誌』とは20年を隔てた刊行の中で総体としては発展し、進化を遂げた。これも東亜同文書院生の大調査旅行の記録の充実、蓄積のたまものであった。後者の全22巻が揃ったならば、圧巻の全誌となり、より一層高い評価がされるに至ったと思

われるだけに、残念であり、担当した編集者や執筆者の無念さが伝わってくる。前述したように、第3巻までと第4巻以降には編構成に違いがあるが、全体としてみれば、『支那省別全誌』シリーズの編構成が集約され、対象領域も広がり、今日から見ても中国の総合的研究へとレベルアップしたといえる。

- (7) この20年間の比較は、遠隔地域の省については比較が可能であり、その遠隔地の記録内容からメーランドの動きの反映も読み取ることができ、様々な分析も可能である。本稿では国内外間の物流に注目してその変化と背景を考察した。とりわけ上海を中心にした長江流域経済圏が、『支那省別全誌』シリーズではまだなんとか四川省重慶まで伸びようとしていた状況が、『新修支那省別全誌』シリーズでは確実にネットワークが形成され始めたことが明らかとなり、民国の中によりやく省を超えた広域の経済圏の姿が表れ始めたことが浮かび上がり、その背景には三峡を貫く航路の開発があったことも明らかとなった。また、重慶ではこれをテコにして奥地の周辺の省と内陸交易が進み、その中心地としての位置付けが見られ始めたことも明らかになった。
- (8) このように、両シリーズは進化を遂げ、膨大な情報量を内包している。それは明らかに、大陸を半世紀も脚で歩きまわり、誰もなしえなかった記録を蓄積した東亜同文書院生の汗と冒険、そして好奇心、さらに大陸に身を置こうとした情熱のたまものであることをあらためて確認することができる。それは今日の、ともすればうわべだけが多いフィールドワークへの反面教師にもなっている。

〔付記〕 本論の趣旨は日本現代中国学会全国大会 (2017年10月29日於愛知大学) にて発表した。なお、本研究を進めるにあたり、文部科学省

科学研究費一般 (C) (2014-2016) の「近代中国地域像の基軸と変動——『支那省別全誌』と『新修支那省別全誌』の比較から——」の一部を利用した。付記して謝意を表したい。

¹ 東亜同文会編 (1917-1920)『支那省別全誌』全18巻
東亜同文会。

各巻名18省は本文中参照。

² 東亜同文会支那省別全誌刊行会 (1940-1946)『新修支那省別全誌』第9巻、支那省別全誌刊行会。各巻名は本文中参照。

³ 藤田佳久 (1993)「「幻」ではない東亜同文書院と東亜同文書院大学」(愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『東亜同文書院大学と愛知大学』、六甲出版販売、50-75頁)。

⁴ 根津一 (1917)「支那省別全誌序」、東亜同文会 (1917-1920) 第1巻、5-8頁。

⁵ 根津一 (1917)「支那省別全誌序」、東亜同文会 (1917-1920) 第1巻、5-8頁。

⁶ 小川平吉 (1917)「支那省別全誌序」、東亜同文会 (1917-1920) 第1巻、1-4頁。

⁷ 近衛文麿 (1940)「序」、東亜同文会支那省別全誌刊行会 (1940-1946) 第1巻、巻頭1-2頁。

⁸ 同注6。

⁹ 一宮房次郎 (1940)「序」、東亜同文会支那省別全誌刊行会 (1940-1946) 第1巻、1-2頁。

¹⁰ 米内山康夫 (1940)「凡例」、東亜同文会支那省別全誌刊行会 (1940-1946) 第1巻、1-5頁。

¹¹ 吉本仁 (1976)「大旅行誌と支那省別全誌」、『滬友』

38号、73-75頁。

¹² 土井三子雄、他 (1928)「旅行日誌」(雲南奥地からビルマへのコース)、藤田佳久編著 (1998)『中国を越えて』東亜同文書院中国調査旅行記録第3巻、大明堂刊、1-224頁。

¹³ 藤田 (1993) 等。

¹⁴ 根岸佑編 (1907-1908)『支那経済全書』全12巻、東亜同文会。

¹⁵ 藤田佳久 (1991)「波多野養昨の中国・西域踏査旅行について——東亜同文書院の中国調査旅行実施への契機となった踏査旅行記録から——」『国際問題研究所紀要』第94号。

¹⁶ 藤田 (1993)。藤田佳久 (2000)『東亜同文書院・中国大調査旅行の研究』大明堂。

¹⁷ 日清貿易研究所編 (1892)『清国通商綜覧』全3巻、丸善商社書店。

¹⁸ 根岸佑編 (1907-1908)

¹⁹ 東亜同文会 (1917-1920) 第10巻。

²⁰ 東亜同文会 (1917-1920) 第14巻。

²¹ 東亜同文会支那省別全誌刊行会 (1943) 第4巻、94頁、38頁。東亜同文会支那省別全誌刊行会 (1943) 第5巻、599頁、20頁。

²² 馬場欽太郎、東亜同文会支那省別全誌刊行会 (1943) 凡例1-4頁。